

J・ジェイルズ『ジャン・ジュネの映画』

池田, 和隆

<https://doi.org/10.15017/9981>

出版情報 : Stella. 16, pp.147-150, 1997-07-01. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン :
権利関係 :

J・ジャイルズ『ジャン・ジュネの映画』

池 田 和 隆

近年のジュネ研究の動向としては、80年代後半以降アルベール・ディシィやエドモンド・ホホワイトらによる評伝の出版があいついでいることからわかるように¹⁾、伝記的・実証的な関心が高まりをみせているといえるだろう。とりわけ注目されるのが、それまであまり顧みられていなかった政治作家や映像作家としてのジュネに焦点をあてようとする動きである。本書もそうした流れをくむものであり、唯一の映画作品『愛の唄』(1950)を中心に、構想段階で頓挫した他の未完成作品にもふれながら、ジュネの映画活動を総体的に把握しようとする²⁾。『愛の唄』などのスチールを多数収録し、映画鑑賞の手引きとして読むこともむろん可能だが、緻密な調査や豊富な資料によって研究書としての活用にも十分たえるものだ。仏語版の出版からすでに数年が経過した現在でもその重要性はいっこうに色あせていない。

本書には数人の研究者による論考や、ジュネ自身による覚え書を付した未完のシナリオなどがおさめられているが、なんといっても中核をなすのはジュネの映画活動全般にたいする著者ジャイルズの考察である。論述はまず、ジュネがかなり早くから映画に強い関心をしめたことや、いく度も映画製作をこころみがつねに失敗におわったことなどを概観する。そののち『愛の唄』の創作過程や流通のもようについて言及がなされ、作品の分析がこれにつづく。最後にスチールをもちいた解説や関連情報が併載されており、分量的には多くはないが読みごたえのある内容となっている。論述にそって少しくわしく見てみよう。

『愛の唄』が撮影されたのは1950年、ガリマール社から全集の刊行がはじまる2年前のことである。また著者が列挙している未完成のシナリオ群を見ればわかるように、ジュネは早期から、そして以後も長年にわたってじつに多くの映画作品の製作をこころみていた。著者の指摘する実証的事項のなかでもとり

わけ興味ぶかいのは、自作にたいするジュネの一定しない態度であろう。すでに進行中の計画を突然破棄してしまうことも稀ではなかった。そういったことが災いして実際に完成した作品はわずかに1本だったのである。その唯一の例外『愛の唄』の製作過程では、ニコ・パパタキスとの出会いがまず重要な契機となった。ジャン・コクトーによって売り出され、恩赦によって晴れて自由の身となったジュネは、やがて実存主義者のたまり場となっているサン＝ジェルマン＝デ＝プレのクラブに出入りするようになる。クラブにつどう客たちのなかから芸術家を発掘していたのがオーナーのパパタキスであった。彼との出会いによってジュネの映画撮影の意志は現実性をおびはじめ、その結果として25分の短編が完成したのである。

ジュネ作品がしばしばそうであるように、舞台となるのはここでもやはり牢獄である。あるとき看守は奇妙な光景を目撃する。格子窓から囚人が手を伸ばし、隣室の囚人に花飾りを手わたそうとしている。さらに看守はとなりあうふたつの部屋の奇妙な囚人たちに気づき、魅入られたようにふたりを見つめはじめる。彼らは隣室の囚人のことを想いながら、壁を愛撫したり、壁の小さな穴をとおしてタバコの煙を送ったりしているのだ。この光景は看守のエロチックな妄想をかきたてる。しかし囚人もまたみずからの幻想世界をつくりあげており、画面は牢獄の場面から看守の幻想、そして囚人の幻想へとつぎつぎにうつりかわっていく……。

作品の分析にあたって著者が採用するのは主題論的なアプローチである。すなわち小説や演劇など他のジャンルに属するジュネ作品から適宜引用をおこないつつながら、イメージやテーマ、あるいは構造といったレベルで『愛の唄』との共通要素をさぐるのだ。たとえば『愛の唄』において見られる3層の語り（牢獄、看守の幻想、囚人の幻想）は、『花のノートルダム』にはじまり演劇作品においてさらに発展することになる、錯綜した語りの構造と重ねあわされる。また独房のなかで囚人が愛撫し性器を突きつけたりする壁、いわばエロチックな壁はすでに『花のノートルダム』で描かれたものだった。壁がつくりだす循環構造は『愛の唄』に類出するが、その原型は『死刑囚監視』などのなかにも求めることができる。また独房からのぞく手もっている花飾りは、『泥棒日記』などに見られる囚人と花の連想を直接想起させる。囚人のひとりが黒人であることも『黒人たち』の状況設定や、さらには自らを異邦人で被抑圧者であると

感じた幼少時の外傷的な体験へとむすびついていく。

後半部に収録されたいくつかの一次資料も本書の重要な部分をなす。未完成シナリオ「徒刑場 *Le Bagne*」³⁾ および「目の青 *Le Bleu de l'œil*」の紹介とジュネ自身による覚え書、ジュネの映画活動についてのディシィとホワイトの対談、さらにはニコ・パパタキスへのインタビューなどがそれである。このうちふたりの研究者による対談はジュネの映画にたいする関心の発現からはじめて、作家デビュー後に彼がコクトーラから受けた影響などについて実証的事実を再確認するかたちですすめられる。さらに『愛の唄』の多面的な性格についても言及がなされる。この映画は、観客が対象を見つめるという映画の構造そのものを内包した「映画（形式）についての映画」であり、また作品史的な観点からは牢獄が主要な舞台となる最後の作品でもあるのだ（恩赦獲得により牢獄とは無縁の身分を保証された翌年に、牢獄を舞台とする作品から遠ざかるという奇妙な一致が指摘されている）。

対談の内容はさらに、ジュネ作品の総体のなかで映画はどのように位置づけられるべきかという問題へと移っていく。ここでとりわけ注目すべきは、映画において小説の構造が再構築されているのと同様に、小説においても映画の痕跡が色こく見られるという指摘であろう。あきらかにここではジュネの映画を「失敗したジャンル」と見るのではなく、それと他ジャンルとの相互的影響のなかに作品生成のダイナミズムをさぐるという新たな視点が提出されているのである。またこれは本書全体についてもいえることだが、『愛の唄』はけっして単独で成立したものではなく、あくまでも他の未完作品群を母胎としていたという意識にもとづき、ジュネの映画活動全体を包括的に問いなおそうとする姿勢が顕著である⁴⁾。

以上のように本書は、豊富な資料と説得的な論述によって、今後のジュネ研究にひとつの新たな可能性を示唆した好著といえるだろう。

註

- 1) Jean-Bernard MORALY, *Jean Genet, la vie écrite*, Paris: La Différence, 1988; Albert DICHY et Pascal FOUCHÉ, *Jean Genet. Essai de chronologie 1910-1944*, Paris: Bibliothèque de Littérature française contemporaine de l'Université

- VII, 1988 ; Edmund WHITE, *Genet*, Paris : Gallimard, 1993 などがあげられる。
- 2) Jane GILES, *Le Cinéma de Jean Genet. Un Chant d'amour*, Paris : Macula, 1993, 160 pp.
 - 3) 「徒刑場」は本書の翌年、ラルバレート社よりアルベール・ディシィとローラン・ボワイエによる解題を付して公刊されている。Voir Jean GENET, *Le Bagne*, Paris : L'Albalète, 1994, 256 pp.
 - 4) こうした姿勢を共有するものとしてつぎの研究論文をあげておこう——Dianne HENNETON, «Un Cinéma selon Jean Genet», *Europe*, n° 808-809, août-septembre 1996, pp. 149-154.